



企業向け農林漁業体験導入マニュアル

実践編

1 農林漁業体験の始め方

農林漁業体験を開始するにあたり、教育ファームに取り組んでいる協力農家へ依頼したり、予算やスケジュールを組んだり、担当者が準備しなければいけないことがいくつかあります。どれも体験活動を充実させるために欠かせないものです。

この章では、どのような手順で準備を進めていけばよいか、実際の取組事例を挙げて説明していきます。

企画の立ち上げ方とその留意点

■ トップダウン型

企業の上層部やリーダーが企画を提案するケースです。例えば人事部等担当部署の管理者が農林漁業体験の時期や内容を決め、それを他の社員が実行するといったケースがこれにあたります。

決定権のある人が動くことで…

メリット

- ・ 目標に向かって関係者全体をまとめやすい
- ・ 物事を決めるにもスピードが早い

こんなところに注意

- ・ トップの指示なしには何もできないケースも考えられる
⇒ 実際の担当者レベルによるプロジェクトチーム等は必要
(トップダウンとボトムアップのミックス)
- ・ やらされている感が蔓延する可能性もあり
⇒ モチベーションを維持するための工夫が必要

■ ボトムアップ型

社内の有志が企画を提案し、意見を出し合いながら実現まで進めていくケースです。社員同士で考え決定するので、当事者意識が芽生えやすい方法です。有志発信型といわれることもあります。

みんなで取り組むことで…

メリット

- ・ チームワークが育まれる
- ・ 上からの指示に頼らず、自ら問題を解決する力がつく
- ・ 一人ひとりに役割ができることで行動力が身につく

こんなところに注意

- ・ 方向性がバラバラになる可能性がある
⇒ まとめ役は必要
- ・ 物事がスムーズに決定しないケースも考えられる
⇒ 進行管理が重要に

トップダウン型にしても、ボトムアップ型にしても、企画を立ち上げる際には様々な立場から意見を募ることが大切です。そして、なぜ農林漁業体験を行うのか、その目的と期待される効果を明確にするようにしましょう。目的と趣旨を理解することで、運営を担当する側も、参加する側も、より積極的に取り組んでいくことが期待されます。



企画書、稟議書の基本構成

企画を実現するためには、説得力のある企画書が必要です。誰が見ても、その目的と効果を明確にわかるものが理想です。農林漁業体験を実施することのメリットは、本書も参考にしてください。

■企画書の構成例

●プログラムの概要

・目的

なぜ農林漁業体験を研修や福利厚生に導入するのかを簡潔に説明することが重要です。

・対象者

人事研修の場合は例えば新入社員研修やリーダー研修、福利厚生の場合は家族まで含めた公募制とするのか等、導入する目的によって、対象者は異なってきます。

・実施方法

開始時期、宿泊形式、公募制等、農林漁業体験をどのような形式で実施するのかを明確にします。

NPO法人等と連携する場合は、連携先の実績等を明記すると、より実現に向けての具体性が出てきます。

●プログラムの全体構成

農林漁業体験をどのようなスケジュールで行うのか、その例を明確にします。1年間の流れと1日のスケジュール案をそれぞれ明記しましょう。

●想定されるメリット

社員にとってどのような効果が期待できるのか。企画書でもっとも重要になる説明です。予算も必要になることから、費用対効果を意識することも大切です。

●実施までのプロセス

実施予定月を定め、それまでにどのようなプロセスが必要になってくるかを具体的に明記していきましょう。

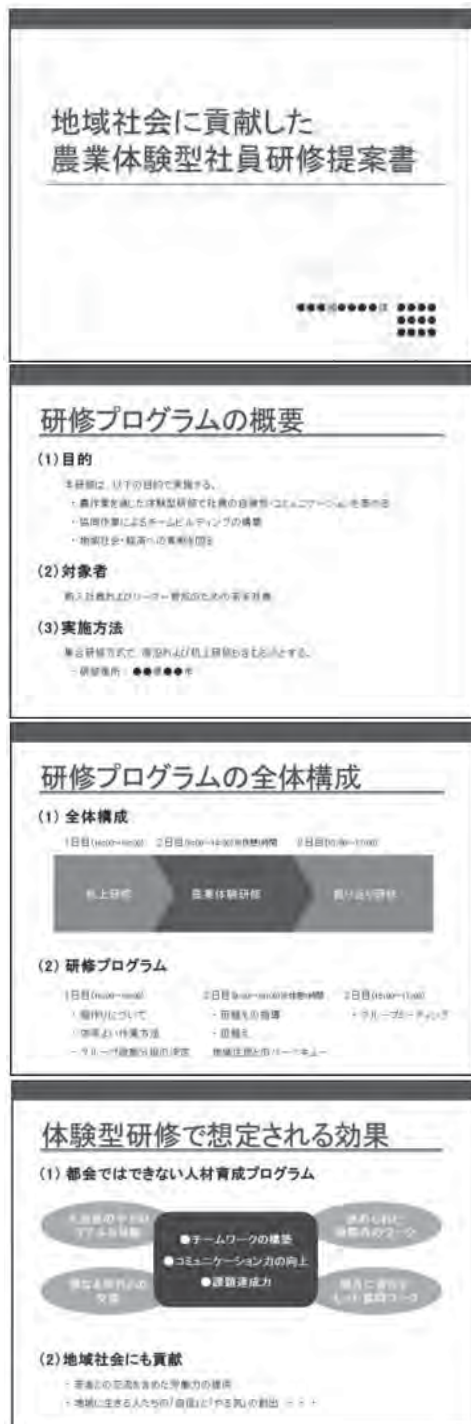
●予算

圃場[※]を借りての活動か、農林漁業体験が行えるスポットでの参加型か、また1年間に数回行うのか等、やり方によって予算は異なってきます。

初期費用だけでなく、ランニングコストについても、根拠のある数字を提示しましょう。予算を確保するためには、会社に納得してもらう材料が必要であり、事前の下調べをしっかりと行うことが重要です。

※圃場とは、作物を栽培する田畑のことをいいます。

【企画書例】



協力体制の確保

農林漁業体験活動は、農林漁業者、行政、自治会、農業者団体、NPO法人等と連携して行われることがほとんどです。

ここでは、様々な条件があるなかで、どのように圃場や協力団体を探せばいいのか、そのヒントを紹介します。

農林水産省のWEBサイトでは、「教育ファーム等の全国農林漁業体験スポット一覧」の紹介を行っています。ぜひ参考にしてみてください。

<http://www.maff.go.jp/j/syokuiku/taikenn/taikenn.html>



■NPO法人

NPO法人には、農業従事者の育成、食育、地域共生型の市民ネットワーク作りを目的とし、農林漁業体験をサポートした経験やノウハウを持つ団体があります。

連携の例としては、単発での体験から、圃場を借り受けての長期的なものまで、多種多様です。また、耕作放棄地を利用した企業ファームの運営や、昔ながらの農作業体験の場を提供する団体等があり、目的に応じた相談が可能です。農林漁業体験実施日以外の、日々の圃場の管理等を行っているところも多数あり、NPO法人と連携して研修等を行う企業が増えています。

【参考資料】巻末「NPO法人リスト」(58,59ページ)

■農家・農園

教育ファーム等、農林漁業体験活動を実施している生産者を探すのもひとつの方法です(上記の農林水産省のwebサイトも参考にしてみてください)。また、直売所等で生産者に話しかけて、交流することから始める方法もあります。生産者の多くは、米や野菜の販売目的で来ていますので、いきなり「体験をさせてください」では驚かれるかもしれません。まずは話しかけるところから、そして気楽に雑談等をしながら信頼関係を構築していきましょう。多くの生産者は「農業の先生」としての経験がありません。しかし、技術や知恵、経験を持ち合わせています。自分たちの研修に協力してもらえないか、または協力してくれそうな人を紹介してもらえないかと投げかければ、具体的な相談ができる人を紹介してくれる等、しっかり応えてくれるでしょう。

■行政・農業者団体等

地方自治体や農業者団体等には、体験研修を受け入れてくれる教育ファーム実践農家を斡旋したり、探すアドバイスをしているところがあります。そういった窓口から紹介を受け、農林漁業体験を行うようになった企業は多数あります。

事業面ですでに地域との関係が構築できている企業の場合、その窓口の方から紹介していただいたというケースもあります。農林漁業体験は地域との交流をより深めるものですので、すでにある財産を有効に活用することで、より地域に密着したビジネス展開に発展させる機会にもつながります。

■コーディネーター

都市と農山漁村の共生・対流を活発化するため、農山漁村におけるグリーン・ツーリズム[※]や農林漁業体験を通じた交流、外国人旅行者の受入態勢の構築等が積極的に行われるようになっていきます。グリーン・ツーリズムのインストラクターを育成するスクール等もあり、都市との交流による農山漁村の地域活性化をコーディネートする人も増えています。

また、旅行会社や地方自治体等が行う農林漁業体験ツアーを活用するという方法もあります。

※グリーン・ツーリズムとは、都市住民が農山漁村を訪れ、農林漁業の体験やその地域の自然や文化に触れることを通じて、地域住民との交流を楽しむ滞在型の余暇活動です。



NPO法人との連携

NPO法人と企業が連携し、食育や自然保全活動等も含め、様々な形で教育ファーム等の農林漁業体験活動が行われています。

特定非営利活動法人 えがおつなげて

えがおつなげては、企業のニーズに応えながら農村の資源を有効活用することを目的とした「企業ファーム」という活動を展開しています。

- 事例1…三菱地所株式会社 ・場所：山梨県
- ・活動内容：田植え、稲刈り、夏野菜の収穫等

都市と農山村がともに支えあう持続可能な社会の実現に向けて、2008年7月、耕作放棄地の開墾に取り組むことから活動が始まりました。荒れ放題だった棚田はほぼ昔の美しい姿に復活し、そこで栽培される酒米「ひとごち」を原料にした「純米酒丸の内」が作られています。

また、都市部に住むグループ社員やその家族、丸の内エリアの就業者、住宅事業の顧客等から参加を募り、「食と農」「森林」「エネルギー」「ツーリズム」といった各種ツアーも連携して行われ、2015年2月までに62回、参加者は約1,800人にのぼっています。

- 事例2…株式会社博報堂 ・場所：山梨県
- ・活動内容：田植え、草取り、稲刈り等

2011年12月に株式会社博報堂と株式会社博報堂DYメディアパートナーズの有志社員による耕作放棄地の開墾がスタートとなり、2012年5月より6回にわたるトライアル農業体験（田植え・草取り・稲刈り、それぞれ2回）が行われました。農業体験による普段体験できない経験と交流が、その後の社員間のコミュニケーションや発想に想像以上の反響があり、2013年度から正式研修プログラムとして年10回の農業体験ツアーが実施されました。

認定NPO法人 共存の森ネットワーク

共存の森ネットワークでは、棚田の米作り（キャノンマーケティングジャパン株式会社）や農村交流型ツーリズム（株式会社JTBコーポレートセールス）をはじめ、様々な企業・団体・行政との協働事業を展開してきました。特に、毎年高校生100人が森や海・川の名人のもとへ訪れ、その生業や生き様について「聞き書き」を行なう「聞き書き甲子園」は、20以上の団体との協働によって、事業を13年間継続して行なっています。

- 事例…キャノンマーケティングジャパン株式会社 ・場所：新潟県
- ・活動内容：棚田での米作り等

新潟県村上市高根では、棚田での米作りから集落の暮らしや自然を体験するプログラム等を実施しています。キャノンマーケティングジャングループとの協働事業において大切にしていることは、活動地域の皆様との信頼関係。そのため、新潟では地域住民の皆様の協力を得ながら活動を行っています。

また、キャノンマーケティングジャングループ社員だけではなく、学生や地元NPO法人のメンバー等、様々な人が参加しているのが大きな特徴です。



2 農林漁業体験の下準備

圃場の確保とその管理

教育ファーム等の体験農場として圃場を提供している団体があり、この場合の多くは、実施日のみ農場を利用し、日頃の管理はお任せできます。

また、農林漁業体験を実施している企業の中には、農家やNPO法人等の協力のもと、圃場を確保・管理しているところもあります。圃場に行ける日数は限られますが、日頃の管理を委託することができることも多いので安心です。体験日当日の講師の手配や1日のプログラム作成等の相談を行えるというメリットもあります。

圃場確保のポイント

- ・圃場を借り入れるか、体験農場を利用するか
- ・研修日以外の圃場の管理をお願いできるか
- ・圃場を使用するために費用はどの程度かかるか
- ・参加者の休憩場所やトイレ、駐車場等を確保できるか

■体験農場を活用する

都市住民の交流等、様々な目的で圃場を教育ファーム等の体験農場として提供する農業者団体等が増えています。企業側にとって最大のメリットは、日頃の圃場の管理は心配しなくてもいいという点です。

地域住民参加型の営農活動を行っている農業者団体も増えてきており、このような団体を通じて圃場を探す手段もあります。

■農家・地域住民の力を借りる

農家や地域住民が提供する圃場では、地域の方との交流がより深まるという特徴があります。参加経験者が体験日以外にも圃場に出向き、草取りをしつつ協力者との会話を楽しむ等、交流を大切にしている事例も数多くあります。

■NPO・コーディネーターに依頼する

2009年施行の「改正農地法」により、一般企業やNPO法人も農業に参入できるようになりました（貸借に限る）。これに伴い、NPO法人が耕作放棄地の再利用を目的として、一般企業と協働で活動する事例が増えています。

協働企業を探しているNPO法人もありますので、農業や自然環境保全に関するシンポジウムやワークショップに参加し、協力者を見つけるのもいいでしょう。

また、旅行会社が企画する農山漁村体験ツアーであれば、圃場もあらかじめ確保されています。

ワークショップ参加がきっかけで圃場の確保

地元の大学で行われていた鳥獣害対策のワークショップに参加し、その後も活動に加わって交流を続けたことで、圃場と運営スタッフの確保に至ったケースもあります。行政関係者や専門知識をもった人とつながれば、圃場のみならず農林漁業体験の先生役まで見つけれられるかもしれません。興味のある分野にはアンテナを張って積極的に交流を図りましょう。



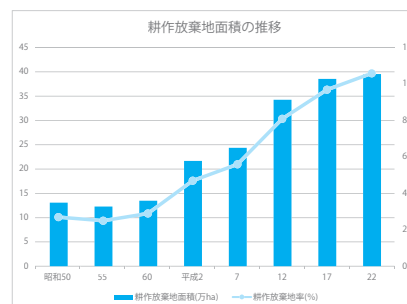
耕作放棄地の状況

農地面積は減るばかり。このままで大丈夫？

- ・日本の農地面積：609万ha（昭和36年）→454万ha（平成25年）

日本の農地面積は、耕作放棄や非農業用途への転用等により、この半世紀ほどの間に約150万ha減少しました。これは岩手県（都道府県別面積で全国第2位）とほぼ同じ面積です。

耕作放棄地＝以前は耕地だったが、過去1年以上作物を栽培せず、しかもこの数年の間に再び耕作する考えのない土地



農林水産省「農林業センサス」

耕作放棄地があると……？

- ・荒廃した土地はそのままでは利用できない
- ・病虫害の繁殖、鳥獣害の拡大
- ・廃棄物が不法投棄される（景観、治安上の問題）

「改正農地法」による農地の有効利用の促進

政府にとっても耕作放棄地は喫緊の課題です。農地をより活用してもらおうと、改正農地法（2009年施行）によって、条件付きではありますが一般法人も農地を借りられるようになりました。また、農地の借上げ、種苗・肥料の供給、作付の技術指導を農業者団体が全面的にバックアップする等、農地有効利用の促進が図られています。

農業体験施設の整備と支援

NPO法人が中心となって、耕作放棄地を再生した圃場に参加者を募っての農業体験が行われています。その取組のために設備を整える支援がなされています。

耕作放棄地再生利用緊急対策

対象：荒廃した耕作放棄地を引き受けて、作物生産を再開する農業者、農業者組織、農業法人 等

内容：再生作業及び土づくり、農業体験施設等の整備 等



このように改正農地法をはじめとした支援体制が整備されてきています。定められた条件さえクリアすれば、農業従事者ではない個人や団体でも耕作放棄地等を圃場として利用できます。思っていたよりも農業体験のハードルは低いかもしれません。

活動の決定

農林漁業体験の協力者や圃場が確保できたら、次は活動の内容を決め、作物やプログラムを決めていきます。細部まで考えるのは大変かもしれませんが、段々と計画が具体化してくる楽しみがあります。

■プログラムの例

プログラムを検討する際は、連携している農家やNPO法人等と相談しながら具体的なプランを立てましょう。

- ・米作り

例：田植え、稲刈り、草取り 等

- ・季節の野菜作り（植えつけ・収穫 等）

作物の例（次ページ参照）

※植えつけから収穫までの一連の作業を行うようにしましょう。

- ・耕作放棄地の環境整備

例：草取り、清掃、あぜ道作り、開墾作業（抜根、刈払、土づくり等） 等

- ・開墾した耕作放棄地を利用しての米作り

例：種蒔き、田起こし、田植え、稲刈り、復田作業、たい肥作り 等

- ・きのこや山菜等の採取、植樹、間伐

- ・収穫した作物を使った食体験

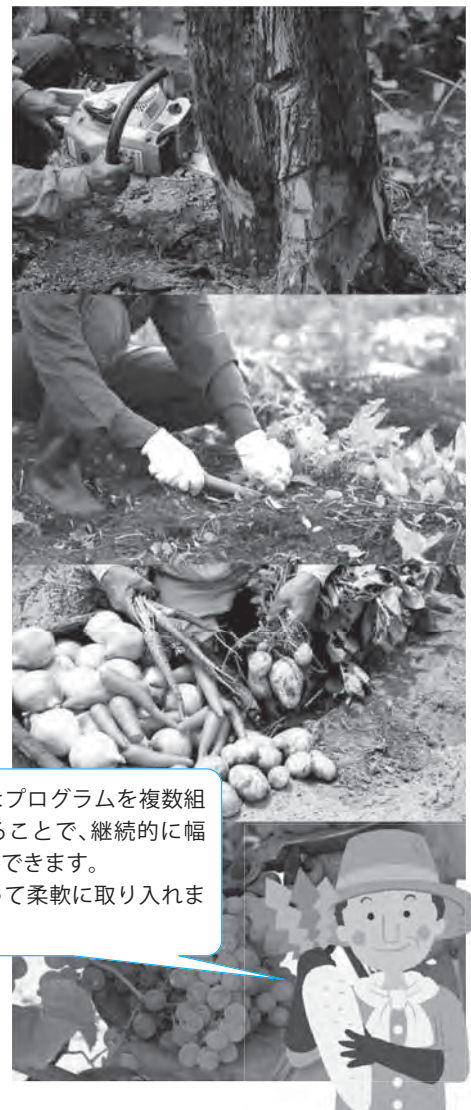
新たな地元の特産品を考え提案する

- ・生産者との交流

例：お祭り等伝統行事に参加、食体験（郷土料理等）

- ・田畑や森、ビオトープでの生き物観察

観察結果に基づいて、今後の整備・保護計画を立てる



いろいろなプログラムを複数組み合わせることで、継続的に幅広い経験ができます。目的によって柔軟に取り入れましょう。

プログラムを組むポイント ～工夫次第でバラエティ豊かに～

- ・時期や期間は適切か…特に作物は、地域や気候により種蒔きや収穫時期が異なるため注意しましょう。
- ・参加者の年齢や階層にあった内容か…難しすぎ・簡単すぎではないか。子どもが参加する場合は、子どもにも楽しめる企画を取り入れる配慮が必要です。
- ・魅力ある内容になっているか…地元の農家との交流を図るためのバーベキューや自然環境を楽しめるイベント（畦道を利用した流しそうめん等）等も有効です。



作物栽培カレンダー

	米	枝豆	トウモロコシ	ダイコン	ホウレンソウ	ブロッコリー	ネギ
4月	田起こし 種蒔き 畔塗り(くろぬり)			種蒔き①	種蒔き①		種蒔き
5月	代掻き 田植え	種蒔き	種蒔き	収穫①	収穫①	収穫①	
6月	草取り(適宜)						
7月							
8月		収穫	収穫			種蒔き②	
9月				種蒔き②	種蒔き②		
10月	稲刈り 乾燥						
11月	精米・脱穀			収穫②			
12月	たい肥作り				収穫②	収穫②	収穫
1月							
2月	たい肥管理					種蒔き①	種蒔き
3月				種蒔き①			

(注) 栽培時期は目安であり、地域や気候により異なります。

3 実践モデル例

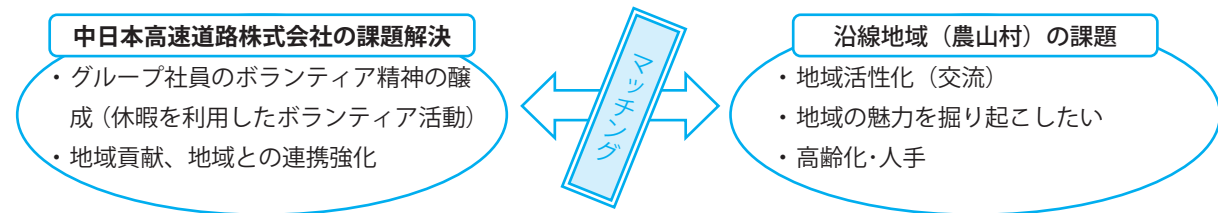
農林漁業体験の実践モデル例（年間を通じた取組）

● 中日本高速道路株式会社 ● 「地域貢献」

- ・実施期間：5月～翌年3月（2014年度）
- ・特徴：複数の地域団体と連携したことで、年間を通じて、バラエティに富んだ農山村での活動を実践
※2014年度は6カ所（静岡県、三重県、福井県、富山県内）



中日本高速道路株式会社では、高速道路の沿線地域の課題解決に向け、ほぼ1年を通じて地域住民と協働で農村整備作業等を実施しています。



- 【実施地】
- ・静岡県 沼津市（浮島地区）、静岡市葵区（水見色地区）、浜松市北区（都田地区）
 - ・三重県 亀山市
 - ・福井県 三方上中郡若狭町
 - ・富山県 南砺市（五箇山菅沼楮集落）
- 【工夫した点】
- ・協働相手を探すにあたり、静岡県の「一社一村しずおか運動」*や富山県の「中山間地域保全パートナーシップ推進事業」*を活用する等、自治体と連携
 - ・各地域の課題や希望にあわせて活動内容を決定し、地域住民との良好な関係作りを構築
- ※一社一村しずおか運動：静岡県公式サイト（<http://www.pref.shizuoka.jp/kensetsu/ke-630/issyaission/index.html>）参照。
- ※中山間地域保全パートナーシップ推進事業：
富山県公式サイト（http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1605/kj00009579.html）参照。

年間スケジュール

	4月	5月	6月	7月	8月	9月
浮島地区		田んぼの代かき 田植え作業		田んぼの種取り		稲刈り
水見色地区		お茶を収穫		中山の草刈り		
都田地区		ジャガイモ畑の草取り みかん摘果	ジャガイモ収穫 サツマイモ・大豆植付 彼岸花の球根植付		みかん摘果 休耕地の草刈り	
亀山市		お茶摘み		お茶摘み		お茶摘み 農園を整備
三方五湖					三方湖のヒシ刈り 湖畔の草刈り	
五箇山 菅沼集落			茅場の下草刈り			茅場の下草刈り



農林漁業体験の実践モデル例(短期の取組)

●株式会社JTBコーポレートセールス ●「新入社員フォローアップ研修」

・実施期間:9月下旬から10月上旬にかけて2泊3日

52名を2班に分けて実施(2013年度)

・研修地:山形県飯豊町

・研修内容:農作業体験(稲刈り・開墾等)、ウォーキング、グループワーク、地域住民との交流会 等

この研修はJTBコーポレートセールスと山形県飯豊町と連携して、CSV活動の実践、若手社員の創造力育成を目的として実施されました。このような参加型研修が増えていくことが期待されています。

参加者の感想

「同期との共同作業でチームワークや時間管理等、仕事に直結する気づきが得られた」「畑仕事に取り組んで仲間意識が高まり、大きな達成感も得られた」「手作業の大変さを知った」「食べ物を大切にしようと思った」「世代を超えた交流ができた」「人のあたたかさ・つながりを感じた」「とにかく食事が美味しい」「町の将来に対する危機感に住民と行政が一体となって取り組む姿を見た」

期待される成果

- ・チームワーク、チームビルディング、人と協力しあう気持ち
- ・自分で考え、段取りし、行動する力、自律性、タイムマネジメント
- ・異なる世代、価値観の人たちとの交流によるコミュニケーション力の向上、発想や考え方の転換
- ・相手の立場に立って考える、生きる力の体得

	時刻	
1日目	8:08	東京発。
	午後	新幹線等を利用し飯豊町へ。 飯豊町着。昼食。 開講式 オリエンテーションとイントロダクション セミナー(古民家にて) 「地元学」 フィールドワーク(展望台や雪室等)
	夜	夕食(農家民宿) 農家と交流
2日目	朝	農作業(農家自家菜園)
	終日	朝食作り手伝い→朝食 農作業 (稲刈り、耕作放棄地開墾、畑作り等)
	夕方	昼食 (おにぎりと漬物、芋煮を田んぼの脇で)
3日目	夕方	交流会準備
	夜	地域住民との交流会
	朝	朝食作り(新でご飯を炊く) 森林ウォーキング
	午後	出発準備、施設清掃
		昼食 成果発表会(グループごとに発表)
	16:20	閉講式
	18:48	山形新幹線で帰路へ。
		東京着。

【山形県飯豊町観光協会】
<http://www.iikanjini.com/>

10月	11月	12月	1月	2月	3月	
	わんど(池)周辺の草刈・草刈			休耕田の草刈り	道路の清掃	浮島地区
中山の草刈り	植樹				ハイキング道整備(高山の森)	水見色地区
サツマイモ・大豆収穫		みかん収穫		芝桜の草取り・整備 ジャガイモ植付		都田地区
						亀山市
三方湖のヒシ刈り 外来魚の駆除 湖畔の草刈り						三方五湖
茅刈り	棚田の農作業					五箇山 菅沼集落

4 年間スケジュール例

圃場や活動の内容が決まったら、次に年間プログラムを立てていきます。

特に1年もしくはそれ以上の長期にわたる場合は、企画担当者にとっても参加者にとっても無理のないことが大切です。そのためにも社内行事の予定等を把握し、負担をかけすぎないスケジュールを組む必要があります。

■作物を選ぶ ～まずは簡単な作物を～

連携している農家やNPO法人等とよく相談して決めるのがいいでしょう。

チャレンジ精神は大切ですが、最初から難しすぎる作物、手のかかる作物を栽培しようとする、運営だけでなく、参加者にも予定外の負担を強いることになりかねませんので注意しましょう。

特に気をつける点

- ・病害虫に強いのか……「せっかく頑張ったのに収穫なし」では達成感を得ることができません。病害虫のリスクが高いものは、何かと手がかかります。
- ・栽培期間に無理はないか…業務繁忙期に農作業のピークが重ならないようにしましょう。

■内容・時期を決める ～無理なく充実させるために～

事前に何をどこまで行うのかを明確にすることで、参加者にも目標ができます。研修として活用する場合は、実際の作業を行う前に目標を達成するための役割分担を参加者同士で決めさせたり、振り返りの時間を盛り込む等、机上でのグループワークと組み合わせるといいでしょう。調理・加工体験といったイベントも効果的です。

こんなところに気をつけて

内容…参加者のレベル(経験の有無)を把握して、無理なく行える内容にします。特に初心者がメインの場合は、興味関心をひくプログラムを用意しましょう。調理や加工体験等のイベントも盛り込むとメリハリがつきます。

時期…社内行事の予定日前後や業務のピーク時期を避けてスケジュールを決定します。天候等で予定を変更する場合のことも考えておきます。

- ・雨天でも実施日は変更しない(屋内でできる調理・加工等、別の内容に置き換える)。
- または雨天の場合は別の日に順延する、等。

草取り等の作業日は参加者が減ることも。そういった日はイベントを導入するのも効果的です。農家やNPO法人等の協力者と連携・相談して、プログラムを決めましょう。





年間スケジュール例

	社内行事	米	野菜	イベント
前年度		1月 NPO法人と第1回打ち合わせ(研修の目的等) 2月 NPO法人と第2回打ち合わせ(作物・圃場の決定) 3月 新卒者採用活動始(人事部)		
4月	入社式 新入社員集合研修 新卒者向け会社説明会(人事部)	田起こし 種蒔き くろぬり	土づくり 枝豆蒔き	トレッキング 散策
5月	新卒者向け会社説明会(人事部)	代掻き 田植え	トウモロコシ蒔き	タケノコ狩り 山菜取り
6月		草取り		植物・生物調査 郷土料理教室 梅干しづくり
7月	創立記念日	草取り	枝豆収穫	ホタル観賞 川遊び かかし作り
8月	新卒者採用選考始(人事部) 夏季休暇	草取り 水路整備	トウモロコシ収穫 ブロッコリー蒔き	ザリガニ釣り
9月		稲刈り	ブロッコリー植えつけ	
10月	健康診断	稲刈り		伝統工芸教室
11月		脱穀		漬物作り 収穫祭
12月	忘年会・納会	たい肥作り 縄作り	小松菜蒔き	郷土料理教室 伝統工芸教室
1月	仕事始め・新年会	酒仕込み神事	小松菜収穫	味噌作り
2月		たい肥管理	ブロッコリー収穫	郷土料理教室 伝統工芸教室
3月	決算	新酒蔵出し	土づくり	
		NPO法人と打ち合わせ(次年度に向けて振り返り)		

特に最初の年は、社内・社外とも早めの打合せ等をしっかりと準備することが大切です。前年度のうちから計画を立て、「いつ・何をする」のかを明確にしておきましょう。また、体験活動後は内容を振り返り、次回以降に役立てていきましょう。

5 予算および運営資金面での工夫

運営資金の調達

農林漁業体験を行うには、圃場の管理費や宿泊費、交通費の他にも道具や参加者の保険料等、様々な費用がかかります。

研修費用のモデル例(日帰りの場合)

日帰りで東京近郊にある圃場へ(年3回)	・圃場管理費(60㎡/種苗代、道具使用料込み)
参加者10名(各回とも)	90,000円(実施期間3ヵ月分)
・1回目 枝豆等植え付け 圃場整備	・交通費(貸し切りバス) 120,000円(40,000円/1回あたり)
・2回目 圃場整備(草取り等) 梅干作り	・梅干作り体験 5,000円(10名分、1回実施)
・3回目 枝豆等収穫 バーベキュー	・食費(昼食) 15,000円(10名分、5,000円/1回あたり)
	・レジャー保険 1,500円(10名分、500円/1回あたり)
	計 231,500円(年額)

上記は日帰りの例ですが、宿泊を伴う場合は宿泊費や朝夕食代等も必要になります。

宿泊は農家民泊やホテル等が考えられます。NPO法人や地元自治体の担当者、圃場提供者に予算を含め、相談してみるといいでしょう。この他にも運営スタッフの人件費や研修参加者への指導料等も考慮に入れる必要があります。

福利厚生として活用している企業には、参加者から費用の一部を参加費として徴収しているケースもあります。

■運営資金に関する悩み・課題

会社でどこまで負担するか？
交通費だけは社員負担にするか？
参加費を徴収する場合の負担割合は？

人材教育の素材としては魅力的だな。
圃場を借りようか？
体験日だけの参加型にするか？

座学型研修のほうが短時間かつ低コストで済みそうなのに、わざわざ圃場まで足を伸ばし、時間とコストをかける意味はあるのかな？

人事研修やCSRであれば、会社負担になるな。
福利厚生と組み合わせてみようか・・・

費用対効果は無視できない。
人材育成の場として、費用は妥当か？
実際の事業に結びつく展開はできないか？



次のページでは、実際の事例から運営資金の調達例を紹介します。



運営資金 こんな工夫

キャノンマーケティングジャパン株式会社「未来につなぐふるさとプロジェクト」

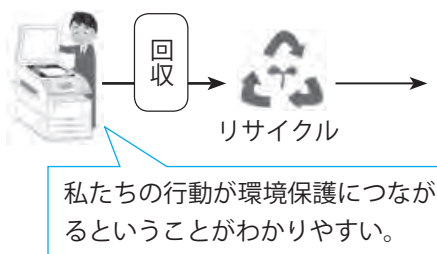
・活動内容 「生物多様性を育む社会づくりへの貢献」を実現するため、環境保全・環境学習活動を実施しています。

NPO法人および地域住民と協働し、国内13ヵ所で活動中。(2014年現在)

「未来につなぐふるさとプロジェクト」公式サイト:<http://cweb.canon.jp/csr/furusato/index.html>

工夫① 自社事業と連携

カートリッジ事業部門で先行して行われていた使用済みカートリッジの回収と連携し、プロジェクトの活動原資にする仕組みを確立。



回収した本数に応じた金額をプロジェクトの活動原資に

自社事業と連携することで、「単なる環境活動」から「自社事業に環境価値を付加する活動」へと発展させました。こうすることで社内外の理解を得やすくなります。



工夫② クリック募金

「未来につなぐふるさとプロジェクト」サイトでは、全国13 地区の活動概要を報告するとともに、一般の方も参加する仕組みとしてクリックによる募金を行っています。サイトを訪問した人は、1クリック=1円で「13地域の中から1地域を選び寄付」もしくは「13地域の全てに均等に寄付」することができるようになっています。これまでに1,952,647円*の協力を得て、それぞれの地域での活動に充てられています。

※2011年からの累計金額(2014年12月末現在)



活動報告と運営資金協力の場合が1ヵ所にまとまることで、サイト訪問者の関心と協力を得やすい体制が整っています。

■運営資金の扱い方

実際に農林漁業体験を実施している企業は、どのようにして運営資金の課題をクリアしているのでしょうか。

- ・教育費(研修費)として予算を組む(人材教育を重視)
- ・参加者一部負担(福利厚生として実施)
 - ①交通費、宿泊費等参加者負担とする項目を決める
 - ②一人あたりの費用を算出し、その2~3割を参加費とする

この他にも「何社かの中小企業で運営する『中小企業モデル』をつくり、負担を軽減したい」(株式会社マーケティングフォースジャパン/52 ページ参照)と新しい形を提唱する動きもあります。コストで無理は禁物ですが、「研修でつくった日本酒が、営業の場で話題になった」(日本電気株式会社/54 ページ参照)といったビジネスで役に立った報告例もあります。

あなたの会社が求めること、農林漁業体験が会社のどの面で・どの程度役に立つか、それらを考慮し、研修にかけられる予算を見極めましょう。

6 農林漁業体験を始める！

当日までの準備

ここまで圃場を確保し、作物が決まり、年間のスケジュールを決めてきました。あとは農林漁業体験が円滑に進むよう、当日のプログラムを具体的に詰めていきます。

■当日のプログラムの決定

当日の流れを把握するためにプログラム表を用意しましょう。(39～41ページ「タイムスケジュール」参照)

- ・参加者と生産者・スタッフの作業内容を書き出します。
- ・スタッフの役割分担(受付、誘導、進行、体験補助、安全管理等)を決めます。
- どのスタッフがいつ・どこで・どの作業を・どのような手順で進めるかを書き込みます。

プログラム表ができたら、無理のない時間配分になっているかをチェックします。

- ・参加者の年齢、作業の熟練度、拠点となる施設と圃場までの移動時間や手段・ルート
- ・実際の農林漁業体験等の時間とイベントの配分 等

■道具類の準備・確認

- ・道具類のリスト

必要な道具をリストアップし、スタッフ側が準備する道具、参加者が持参する道具を洗い出します。

道具	点検内容		備考
鎌(草取り用)	運営側で用意	10本あり。1本だけ柄が緩んでいる。	修理不可なら前日までに買い換える。
救急箱	運営側で用意	消毒用アルコールが残りわずか。	消毒用アルコールの予備を買い足しておく。
長靴、軍手	参加者持参		すべりどめがついた軍手を持参するよう、案内状に書く。

- ・現地の案内図

圃場周りの情報(危険箇所等)を全員で共有します。

- ・案内状には、以下のような内容を盛り込みます。

日時、集合場所(地図や交通アクセス)

当日のスケジュール

持ち物(作業服、長靴、軍手、替えの靴下、帽子、タオル、水筒、保険証のコピー 等)

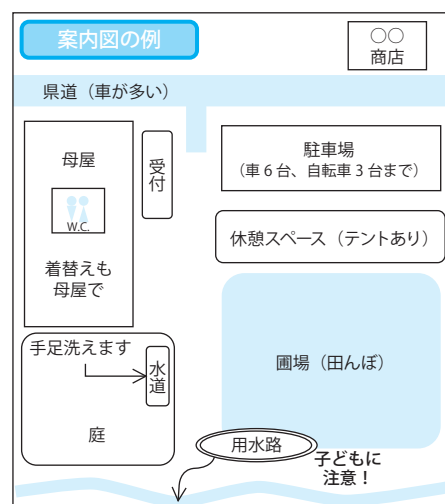
服装(長袖・長ズボン、動きやすく汚れてもよい服装 等)

雨天の場合の対応(天候や事故で中止を判断する基準、判断する時刻、参加者への連絡方法 等)

主催者側の当日の連絡先

注意事項(作業時の注意やルール 等)

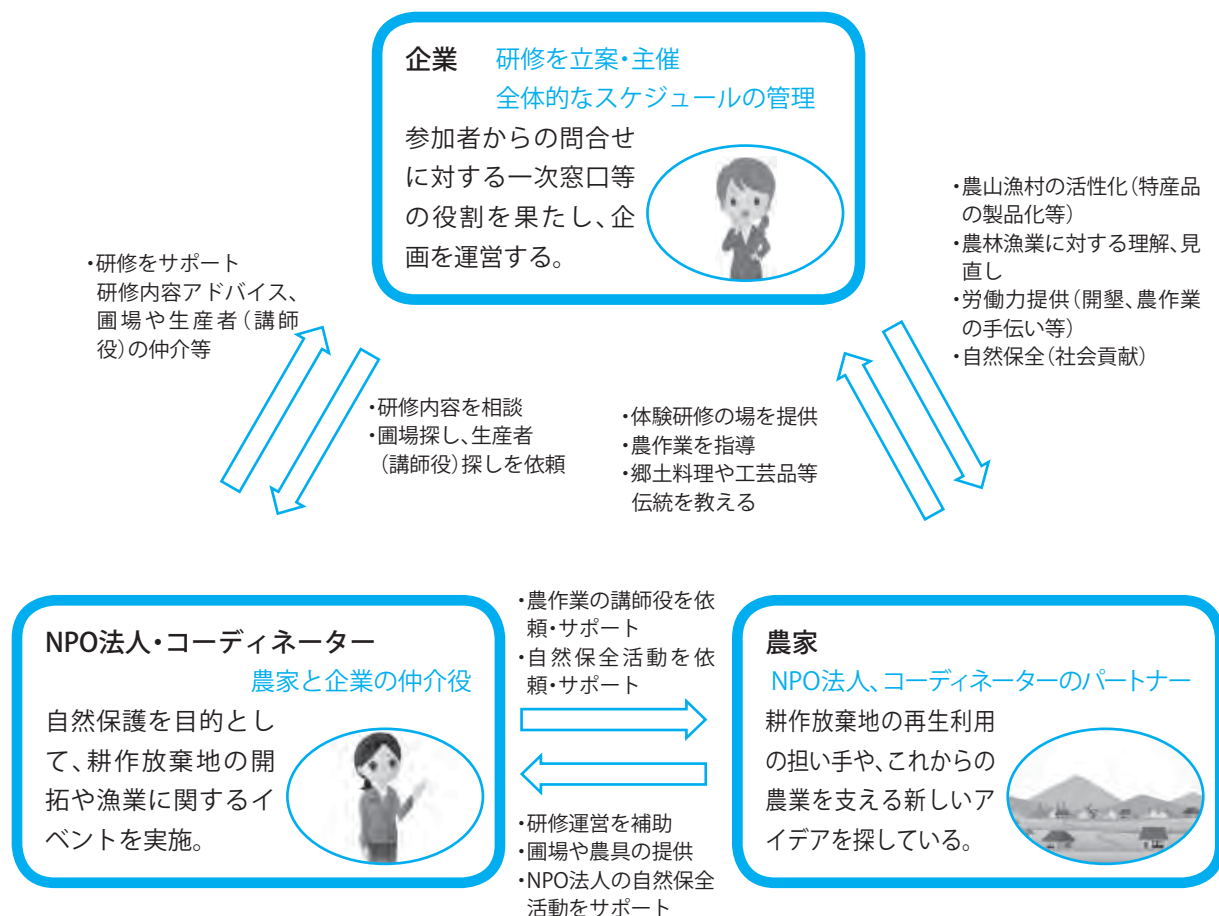
参加費





役割分担の例

農家やNPO法人、コーディネーター等と連携して行う場合、農機具や圃場の準備・手配を任せたり、体験内容を相談することができます。お互いの役割分担を明確にすることで、企業側は自社内での参加者募集や事前研修等に集中することが可能になり、負担を軽減することができます。



■リピーター大歓迎！

何度か体験活動を実施して軌道に乗り始めると、リピーターが指導者としての役割を担うことが期待できます。

- リピーターに期待できること
- ・先輩として初めての参加者をサポート
 - ・研修の意義や目的を理解した上で、新しいプログラムを提案
 - ・クチコミで新たな参加者を呼び込む 等

当日の進め方(例)

主催者(スタッフ、生産者等)は、時間に余裕をもった行動を心がけましょう。

予定や圃場内の案内図はしおりにして手渡せば、いつでも見られるから便利・安心だね(36ページ参照)

事前準備

受付が始まるまでに以下を確認しておきます。

- ・道具の点検:道具の種類、数量は十分か。破損はないか 等
- ・打ち合わせ:当日の進行や注意事項を確認
- ・受付の準備:名簿や名札を準備(しおりは事前配布)



受付

参加者には名札を渡し、見やすいところに着用してもらいます。

当日の予定や、トイレや休憩場所、危険箇所がある場合はその注意事項を説明します。

あいさつ等

参加者が揃ったところで、まずスタッフ、生産者の紹介をします。それから連絡事項を伝えます。

- ・当日の作業の流れ(作物の栽培から収穫までの一連の流れも説明しましょう)
- ・安全対策(農機具の正しい使い方、立入禁止箇所、服装、体調管理、ケガをしたときの対応 等)



作業中はスタッフの指示に従うこと

(子ども連れの参加者がいる場合)常に子どもから目を離さないことを伝えます。

一通り説明した後は、参加者からの質問がないか確認しましょう。

作業中

作業が順調に進んでいるか、何かトラブルは起きていないか常に気を配ります。

片付け

片付け方法と作業分担を伝えます。

片付けも段取りやチームワークを身につける機会になります。



子どもが不用意に遊んだりしないように、鎌等農機具は適切な場所にまとめて管理します。

楽しく、スムーズに作業するためのコツ

・作業グループは「偏りなく」

企業内での役職(階層)、作業経験の熟練度が偏らないようにしつつ、普段の業務では接することのない人同士になるようにすると、コミュニケーション力向上にもつながります。

また、グループにより作業の進行に大きなバラつきが出ないようにしましょう。

・コミュニケーションのお手伝い

作業を始める前に、グループ内でそれぞれ自己紹介をすることを徹底しましょう。その際にグループごとの目標やスローガンを決めるようにすると、話し合いの過程でお互いの人となりを知るきっかけになります。初めての参加者や一人の参加者がいる場合は、グループに溶け込みやすい環境を作りましょう。





1日のタイムスケジュール ●短期(1日)研修●

【野菜栽培の草取り・山菜狩り】

時間割	参加者	スタッフ	生産者	備考
9:00～9:30 スタッフミーティング 受付準備		・圃場、農機具の点検 ・今日の進行の確認	・圃場、農機具の点検 ・今日の進行の確認	【本日必要な道具】 ・鎌(農家側で用意) ・手袋、長靴(参加者が持参)
9:30～9:40 集合・受付	・集合 ・着替え等	・受付 ・出欠確認	・参加者を把握する	
9:45～10:00 あいさつ 全体説明	・自己紹介	・自己紹介	・自己紹介 ・圃場について説明 (危険箇所、注意事項)	
10:00～11:00 作業の説明 作業の準備	・グループミーティング (目標を決める)	・グループミーティング補助	・作業の流れを説明	
11:00～12:00 山菜狩り	・農作業指導 ・山菜狩り	・農作業補助 ・参加者の様子を見守る	・農作業体験 ・山菜の見分け方を教える	
12:00～13:30 昼食	・昼食 ・生産者の話を聴く ・参加者と交流	・昼食 ・生産者の話を聴く ・参加者と交流	・昼食 ・地元産の野菜について説明 ・参加者と交流	・生産者による炊き出し (収穫した山菜と地元特産 の野菜を使用)
13:30～15:00 畑作業(草取り)	・農作業指導 ・畑の草取り	・農作業補助 ・参加者の様子を見守る	・農作業体験 ・鎌の使い方を教える	
15:00～15:30 振り返り	・感想発表	・感想発表	・感想発表	
15:30～16:00 片付け	・片付け →解散	・片付け ・道具類の点検	・圃場整頓 ・道具類の点検	
16:00～16:30 スタッフミーティング 解散		・生産者から意見聴取 (話し合う) →解散	・運営上の感想や要望、反省 点をスタッフに伝える →解散	

参加者に伝えたいこと① ～圃場を知ってもらおう！～

田んぼや畑の中に入って土に触れることで、いろいろなことを感じることができます。それこそが圃場に対する理解の第一歩です。

「耕運機をかける前と後では、こんなに土の柔らかさが違う」「掃除してきれいになった水路に水が流れていくのを見たら充実感がわいてきた」「畑や田んぼを保つ大変さがわかった」等、実感のこもった感想が得られるでしょう。

また、田や畑には洪水の発生を抑えたり、暑さを和らげたりする働きがあることを知ってもらう機会にもなります。



1日のタイムスケジュール ●継続研修 ①田植え●

時間割	参加者	スタッフ	生産者	備考
10:00～10:30 スタッフミーティング 受付準備		・圃場、農機具の点検 ・今日の進行の確認	・圃場、農機具の点検 ・今日の進行の確認	【本日必要な道具】 ・手袋、地下足袋等 (参加者が持参)
10:30～10:40 集合・受付	・集合 ・着替え等	・受付 ・出欠確認	・参加者を把握する	
10:45～11:00 あいさつ 全体説明	・自己紹介	・自己紹介	・自己紹介 ・圃場について説明 (危険箇所、注意事項)	
11:00～11:15 作業の説明 作業の準備	・グループミーティング (目標を決める)	・グループミーティング補助	・作業の流れを説明	
11:15～12:30 田植え作業	・田植え体験 ・生産者、スタッフの指示に従う	・作業補助 ・参加者の様子を見守る	・田植え指導 ・農機具の使い方を説明	・田んぼの生き物観察
12:30～13:30 昼食	・昼食 ・参加者と交流	・昼食 ・参加者と交流	・昼食 ・参加者と交流	・生産者による炊き出し
13:30～15:00 振り返り	・感想発表	・感想発表	・感想発表	
15:30～16:00 片付け	・片付け →解散	・片付け ・道具類の点検	・圃場整頓 ・道具類の点検	
16:00～16:30 スタッフミーティング 解散		・生産者から意見聴取 (話し合う) →解散	・運営上の感想や要望、反省 点をスタッフに伝える →解散	

参加者に伝えたいこと② ～圃場の周りにも目を向けて～



作業に一生懸命になって取り組むのもいいですが、ちょっと一息。手元以外にも目を向けるよう促しましょう。

例えば田んぼの中に目を向けると、おたまじゃくしが蛙になる姿や、ヤゴがトンボに羽化する様子を見ることができるかもしれません。

また、圃場の周囲を見ると、用水路を泳ぐメダカ、米の収穫時期に飛来するサギ、夏には青々と茂っていた山の木々が秋には赤や黄色に色づく姿等、日本の豊かな自然を感じるチャンスがたくさんあります。



1日のタイムスケジュール ●継続研修 ②稲刈り●

時間割	参加者	スタッフ	生産者	備考
10:00～10:30 スタッフミーティング 受付準備		・圃場、農機具の点検 ・今日の進行の確認	・圃場、農機具の点検 ・今日の進行の確認	【本日必要な道具】 ・鎌（農家側で用意） ・手袋、長靴（参加者が持参）
10:30～11:15 集合・受付 作業の説明・準備	春の田植え以降今日に至るまで、草取り等の活動を数回実施。 参加メンバーもすっかり顔なじみになっていることから、作業前の準備はスムーズに進みます。			危険箇所や動植物等、深刻な事態を招く恐れのあるものについては、何回目の作業であっても都度注意をします。
11:15～12:30 稲刈り作業	・稲刈り体験 ・生産者、スタッフの指示に従う	・作業補助 （参加者の様子を見守りつつ）	・稲刈り指導 ・鎌の使い方を説明	
12:30～13:30 昼食	・昼食 ・参加者と交流	・昼食 ・参加者と交流	・昼食 ・参加者と交流	・生産者による炊き出し ・新米のおにぎり
13:30～15:00 稲刈り作業（続き）	・稲刈り体験 ・生産者、スタッフの指示に従う	・作業補助 （参加者の様子を見守りつつ）	・稲刈り指導 （参加者の様子を見守りつつ）	
15:00～17:00 片付け	・片付け	・片付け ・道具類の点検	・圃場整頓 ・道具類の点検	
17:00～ 収穫祭	無形文化財である地元の収穫祭に参加。 お囃子を見学したり、縁日を地元の住民と一緒に楽しみます。			・収穫を祝う場合は、この農業体験のクライマックスです。
夜 宿泊（農家民宿）	・交流 ・農家の暮らしを見学	・交流 ・農家の暮らしを見学	・宿泊者の受入れ ・参加者と交流	・宿泊に必要な持ち物は、事前にリサーチして参加者に周知します。
翌朝	・朝食作りを手伝う ・農家の暮らしを見学 ・清掃。散策等。	・朝食づくり ・農家の暮らしを見学 ・清掃。散策等。	・朝食づくり ・農家の暮らしを伝える	
10:00～11:00 振り返り	・感想発表	・感想発表	・感想発表	
11:00～12:00 スタッフミーティング 解散		・生産者から意見聴取（話し合う） →解散	・運営上の感想や要望、反省点をスタッフに伝える →解散	

参加者に伝えたいこと③ ～農作業の意味～

体験当日は参加者に「農作業の意味」を伝えることで、体験活動の理解を深めることに繋がります。

たとえば、「作物の生育には、1年を通して土づくりや種蒔きから収穫までの一連の流れがありますが、その状態を確認し、日々の気温の変化や天候不順等に対応しながら、作物にとって最良な選択を常に考え導き出しているのです。」等と伝えることで農家の苦労や手間を感じることができ、日々の企業活動との共通点に気づくこともあるでしょう。

また、農家で農業生産工程管理（GAP）*を実施している場合は、その説明も受けることで規模は異なりますが「企業も農家もPDCAサイクルに取り組んでいる」ことがわかり、その共通点から相互理解の度合いと研修の意義がより深まるでしょう。

*農業生産工程管理（Good Agricultural Practice）とは、農産物の生産工程全体を見渡して①点検項目を定め（Plan）→②農作業を実施・記録（Do）→③記録を検証（Check）→④次に向けて改善する（Action）手法で、農業版PDCAサイクルといえます。

7 食体験や生産者との交流

食体験

圃場で農林漁業を体験したら、ぜひ食体験の場も設けましょう。

自分たちが栽培した作物や地元の特産品を調理・加工し、試食することで、研修の成果と達成感をより実感することができます。また、「食を生み出す農林漁業」を意識し、フードチェーン※を理解することにもつながります。

※フードチェーンとは、食品やその材料の生産から加工・流通・販売までの一連の流れをいいます。フードシステムともいわれます。

■食体験で伝えたいこと

食体験を通じて伝えたいことは、食べものの「おいしい」「まずい」ではありません。五感の全てを使って食べものを感じ、感謝の気持ちを深めることです。

農家の知恵を借りた調理方法や加工方法を知り、みんなで地域の伝統食を味わう。こういった体験を通して、農家や地元の人との交流が自然と深まります。これは日常業務で要求される消費者理解、ひいては顧客理解への第一歩にもなります。

●食体験の例●

- ・収穫物を利用した伝統食の調理
- ・収穫物の加工
- 大根→切り干し大根、大豆→味噌

■食体験の事前準備



【会場】

圃場からの移動時間、参加者数、調理計画に見合った場所を探しましょう。

例) 屋内の調理施設: 地元の学校の家庭科室、公民館 等

屋外の調理施設: キャンプ場等の調理施設

持参した調理器具を使って、圃場の近くにある
広場で実施

(畦道にカセットコンロを設置 等)

●農林水産省からのお知らせ●



ごはんを中心とした 「日本型食生活」のススメ

「日本型食生活」は、ごはんを中心に、魚、肉、牛乳・乳製品、野菜、海藻、豆類、果物、茶等、多様な副食等を組み合わせ、栄養バランスにも優れた食生活です。

一食や
一日単位でなく、
一週間の中で

冷凍食品や
レトルトを
使ってもOK!

ごはん食は
主菜・副菜が
そろいやすい

【食材】

必要な食材は事前にリストに書き出し、過不足なく揃えましょう。

- ポイント
- ・生鮮食品(肉、魚、野菜)は新鮮なものを
 - ・消費期限、賞味期限等がある場合は、必ず確認

【調理器具】

調理に必要な器材、調味料等が揃っているか事前に確認します。

調理施設を利用する場合は、そこで借りられるかはもちろん、使用後の返却方法も必ず確認します。



生産者との交流

■ 農林漁業体験で広がる交流の輪

農林漁業体験の楽しみの一つに、生産者等との交流があります。圃場を提供してくれる農家や、食事の炊き出しをしてくれる地元の人等、積極的にいろいろな人と交流できる機会を設けるようにしましょう。

■ なんだかいつもよりご飯がおいしい…？

お昼の休憩に入ると、参加者から「いつもよりご飯がおいしい」という声が上がります。きっと自然の中で思い切り体を動かし、日常の仕事とは異なる体験ができたからでしょう。食事は、食体験の場でもあり、人が和む場でもあります。その地域で収穫されたお米や野菜を使った郷土料理を地元の人とともに囲むことで、食を通して人との交流が広がり深まります。同じ体験をした共有感、日頃の仕事でも同じです。それを改めて理解する場にもつながります。



【農業体験を通じての交流例】

● 認定NPO法人 共存の森ネットワーク



活動の中で、お誕生日会やバーベキューなどを行い、地域の皆様との親睦を積極的に図っています。

● 特定非営利活動法人 えがおつなげて



地元の生産者の方々と一緒に汗を流しながら作業するのが、一番の交流です。

すでに農林漁業体験を実施している企業の参加者には、個人的に農業に取り組みたいという希望者もいます。週末に自主的に農家に手伝いに通ったり、知り合った仲間同士でサークルを立ち上げているケースもあります。

8 安全対策

圃場やその周辺は、注意が必要な場所があったり、動植物に注意しなければいけない等、必ずしも安全が確保できているわけではありません。また、作業中にも危険を伴うことがしばしばあるので、安全対策は確実にしておきましょう。

圃場の確認

体験前に、生産者やスタッフで圃場や周辺の安全確認を行うことが重要です。

危険なものは取り除き、危険な場所がある場合には、事前の注意のほか「立入禁止」の表示や目印をつけましょう。

チェックポイント

- ・置き忘れた農機具や農薬、ガラス破片等危険なものがないか。
- ・用水路やため池に、フェンスや警告板が設置されているか。補修が必要なところはないか。
- ・付近の崖、山林等で落石や崩落の危険はないか。
- ・危険な動植物がないか。

例：ヘビ、イモリ、ヒキガエル、スズメバチ、ブヨ、ウルシ等



■ヒヤリ・ハット事例 ～圃場編～

ヘビに遭遇した参加者が騒ぎ、場が一時パニックになった

木製の柵が腐っているのに気づかず、寄りかかって崖に転落しそうになった

木の枝が子どもの目の高さにあり、ケガをしそうになった(低木注意)

農機具の確認

事前に使用する農機具(鋤、脱穀機等)を点検し、必要に応じて調整、補修、使用中止等の対策を取りましょう。

チェックポイント

- ・農機具の使い方を理解しているか。(特に初心者がいる場合は注意)
- ・壊れていないか。刃ががたついたり、接合部が緩んでいたりしないか。
- ・(参加者に子どもがいる場合)子どもが使える農機具があれば用意する。
- ・(研修終了後)全ての農機具が返却されたか必ず数を確認する。使用者を把握するため、農機具に番号をふって管理するとよい。

農機具の使い方 ～安全のために～

参加者の中には鎌や鋤等を初めて使う人もいることでしょう。鋭利な刃物は、思わぬ事故の原因にもなります。農林漁業体験に農機具の使用は避けて通れません。参加者が農機具の使い方と危険性を正しく理解するよう、説明の仕方を工夫しましょう。

例：参加者の前で「鎌は軽い力でもスパッと切れちゃうから気をつけて」と大根をスパッと輪切りにして見せる。(正しく使えば怖くない、というフォローも忘れずに)

●草取り鎌の使い方●

- 1.利き手で柄をしっかり握る
- 2.もう片方の手で草を掴む
- 3.刃先を雑草の根元にあて引き切る



刃の取扱いには十分注意しましょう！

■ヒヤリ・ハット事例 ～農機具編～

参加者がトラクターに轢かれそうになった。トラクターは思っているよりも大きいので、作業中は近寄らないよう注意した。

農機具を壊したまま返す参加者がいて、片付けの際スタッフがケガをしそうになった。

参加者が振り上げた鋤が他の参加者に接触。ケガはなかったが、他の人と距離をとって使うこと、周囲をよく確認することを再度周知した。



安全対策のための準備

農林漁業体験に参加する多くの人にとって、当日は普段とは違う環境の中で、慣れない道具を使って作業をすることになります。万が一のケガや事故に備えて、安全対策を立てておきましょう。

■安全対策 ～誰が・いつ・何を？～

農林漁業体験の準備段階から当日まで、どのような対策が必要かを下の表のように一覧にしておくと、誰がどの役割を担当するのかが明確になりチェックしやすくなります。

誰が		何を	いつ
企業	担当者 (主催者)	・参加者の連絡先を把握する	申込受付時に
		・各種連絡先を把握する 圃場近くの消防、救急、医療機関、警察 災害用伝言ダイヤル 保険会社	研修前の打ち合わせ時
		・救急箱の用意(簡単なケガに対応できるもの)	研修当日までに
	参加者	・軍手等個人で用意するものを揃える	研修当日までに
NPO法人 コーディネーター		・生産者(農家等)と企業の仲介者として日程や研修内容の調整	研修当日まで
		・当日の天候確認 (荒天の場合)中止や研修内容変更の判断	研修当日
		・参加者の人数に合わせ、農機具を手配し状態を確認	研修当日までに
生産者(農家等)		・日程や研修内容のアドバイス	研修前の打ち合わせ時
		・圃場関係 整備(危険区域のチェック) 備品(農機具等)を置く場所等、圃場内のレイアウト決め	研修前の打ち合わせ時
		・当日の天候確認 (荒天の場合)中止や研修内容変更の判断	研修当日

圃場や道具類の準備のほとんどをNPO法人やコーディネーター、生産者側で引き受けてくれる場合もあるので、企業側の準備が助かるかもしれません。また、安全対策に加えて詳しい情報や希望を相手に伝え、はたらきかけることでさらに研修を充実したものにすることができます。

(安全対策に加えて伝えたい例)

NPO法人・コーディネーターには… (食体験がある場合)アレルギーをもつ参加者の有無。

(子どもがいる場合)人数と年齢を伝え、子ども向け体験メニューをリクエスト。

生産者(農家等)には… 地域行事への参加の有無。

農作業だけではなく、地域のイベントにも参加したい(手伝いたい)等の希望を伝える。

せっかくの機会ですから、
いろいろと相談してみましょう



参加者への伝え方

農林漁業体験の参加者には、事前に案内状等で「注意事項」を伝えます(36ページ参照)。

万全を期すために、当日も作業前に口頭ではっきりと注意事項を伝え、参加者の理解度を深めましょう。

伝え方のポイント

- ・圃場内の危険な場所や立ち入り禁止箇所について、案内図(36ページ)を見せながら説明します。
実際に圃場内を一緒に歩いて説明をすると効果的です。
- ・気をつけなければならない動植物(スズメバチやウルシ、毒キノコ等)がある場合は、注意を促します。
図や写真等を見せ、特徴を伝えましょう。
万が一刺された、触れてしまったときは速やかに申し出るよう伝えます。
- ・作業に適した服装をスタッフが着用し、示します。
参加者がきちんと着用しているか、忘れた人がいないかを確認します。
- ・鎌や鍬等農機具の正しい使い方を実演します(実演例:44ページ)。
- ・雷、ひょう等急激な天候の変化があったときの注意点と避難場所を説明します。
- ・暑い時期にはこまめな水分補給と休憩を、寒い時期には防寒具の使用を勧めます。



■ヒヤリ・ハット事例 ～参加者の行動編～

農作業に夢中になり水分補給を忘れ、熱中症になってしまった

トイレと圃場が離れており、子どもがおもらしをしてしまい着替えが必要に

毒キノコ(食用と見分けにくい)を持ち帰ろうとしていた

緊急時の対応

万が一作業中に事故や病気が生じた場合に備え、事前に緊急時の対応策を確認・決定しておきましょう。

- ・緊急時連絡先(消防・救急、医療機関、警察等)
- ・スタッフの役割(搬送、付き添い)
- ・参加者名簿(出欠・安否把握のため必ず作成)
- ・急激な天候変化、地震等の自然災害が発生した際の避難場所と、そこまでの避難ルート
- ・救急箱を用意し、応急処置の知識を事前に取得

スタッフ全員が安全対策の技術講習会、救命講習会を受講しておくで安心です。

万が一の際にも落ち着いて行動しましょう。
イベントの中止や避難はギリギリになって慌てないように、余裕をもって判断します。



● 救急箱の中身(例) ●

ばんそうこう(防水タイプがおすすめ)、消毒薬、ピンセット(とげ抜き用)、虫刺され薬、冷却シート 等

【参考サイト】

- ・遊ぼんNET(<http://www.asobon.net/>)



安心・楽しい食体験のために ～アレルギー・食中毒対策～

食体験（調理、加工、試食）を実施する場合は、以下のことにも気をつけましょう。

■食物アレルギー対応は慎重に

参加者に食物アレルギーをもつ人がいないか事前に確認しておきます。もしいる場合は、アレルゲンとなる食物や症状の程度、注意点を事前に詳しく聞いておきます。

ごく微量の混入でも重篤な症状をきたすおそれがありますので、細心の注意が必要です。

アレルギーがあっても参加しやすく楽しめるように、食事メニューは複数の候補を用意しておく等、工夫しましょう。

消費者庁「アレルギー表示に関する情報」

(<http://www.caa.go.jp/foods/index8.html>)

■食中毒対策はしっかりと！

スタッフ、参加者とも健康状態や衛生面（服装等）に気を配りましょう。調理前には必ず下記の点を確認します。

- ・下痢、発熱等の症状はないか（該当する場合は参加不可）
- ・手指や顔面にケガ・化膿しているところはないか（ある場合は使い捨ての手袋等を使用する）
- ・エプロンや白衣、割烹着等を着用しているか
- ・毛髪が落ちないようにしているか（三角巾等でまとめる）
- ・時計や指輪を外しているか
- ・爪は清潔か（短く切っているか）
- ・手洗いはしっかりと
- ・調理器具は清潔か（消毒したか）
- ・食器用スポンジ、ふきんは清潔か
- ・（調理中）包丁・まな板の使い分け※ができていないか

※肉・魚とそれ以外（加熱しない食品、加熱後の食品）で使い分けましょう。

清潔な調理器具で
安全・おいしく食体験

《注意すべき食品》

特定原材料

えび、かに、小麦、そば、卵、乳、落花生

特定原材料に準ずるもの

あわび、いか、いくら、オレンジ、カシューナッツ、キウイフルーツ、牛肉、くるみ、ごま、さけ、さば、大豆、鶏肉、バナナ、豚肉、まつたけ、もも、やまいも、りんご、ゼラチン

アレルギー物質を含む食品に関する表示指導要領（消費者庁2013年）より

《調理器具の消毒方法》

塩素消毒

洗剤等で十分に洗浄し、塩素液に浸しながら拭く。

熱湯消毒

85℃以上の熱湯で1分間以上消毒する。



【参考サイト】

政府広報オンライン「暮らしのお役立ち情報」

http://www.gov-online.go.jp/featured/201106_02/contents/genin.html

備えてさらに安心 ～各種保険～

ここまで3つのシーンに分けて、当日起こりうるヒヤリ・ハット事例を紹介してきました。これらの事例以外にも、体験型研修では思わぬアクシデントが起きることがあります。万が一に備え、企画者も参加者も保険に加入しておくことが安心です。

保険会社では、「共済保険」「レジャー保険」「アウトドア保険」等の名称で様々な保険を用意しています。保障の範囲も農林漁業体験中のケガだけでなく、荷物の損壊・盗難・災害に遭遇した場合の見舞金等をカバーするものがあります。コーディネーター等に相談し、自分たちの活動に合った保険を選びましょう。

9 企画立ち上げから実施まで

農業体験研修を実現した担当者の半年

ここまで農林漁業体験の企画から実施まで一通りの流れを紹介してきました。では、実際に研修を立ち上げてから実施するまで、担当者はどのように立ち回ることになるのでしょうか。ある研修担当者の半年を追ってみました。

Memo



Aさん：この春人事部に配属。社会人3年目。今回初めて研修の企画を任されることに。

Bさん：人事部の頼れる先輩社員。

●企画・実施するのは「新入社員 基礎研修」●

研修参加者：次年度新入社員20名
 研修の目的：社会人としての基礎を身につけさせたい
 （コミュニケーション力、チームワーク、段取り 等）
 実施時期：4月下旬に2泊3日で実施。

1. 企画立ち上げ、事前体験(前年度：秋～冬)

今年も次年度の新入社員の研修内容を決める時期がきました。Aさんの会社では例年、名刺交換、電話応対やグループディスカッションといった座学中心の研修を実施しています。しかし、今年は部長の「次は趣向を変えてみないか。そうだA君、何か考えてみてくれ」の一声で、Aさんに来年度の新入社員研修が託されました。

人事部にきて半年。突然大役をおおせつかったAさんは困ってしまいました。

「自分だってまだ社会人3年目。新人研修は受けたが、運営をしたことはまだない」
 しかし、悩んではばかりではられません。先輩のBさんに相談することにしました。



企画立ち上げ

(22ページ参照)
 トップダウン型の場合、内容が一方的なものにならないよう、参加者の立場にたって検討することも必要です。

協力体制の確保

(24ページ参照)

企画書、稟議書の基本構成

(23ページ参照)
 ・協力依頼候補者は複数を調べ、内容・費用とも自社の希望に沿うところを選びましょう。
 ・企画書は一人に任せず全員が携わり、意思の統一を図りましょう。

Bさん「相当困っているね。部長も適当に君に任せたんじゃないと思うよ。新入社員と年が近い君に何か期待してのことじゃないかな。君が新入社員研修を受けたときの感想は？」

Aさん「座学続きで実は少し飽きてました。それから、研修が終われば全国に配属されてしまうので、同期と一斉に集まる機会がなかなかないんですよね。同期のつながりを強くできたら、本配属後も心強いと思うんです」

Bさん「それなら屋外でチームになって作業をするプログラムを取り入れるといいかもね。研修をサポートしてくれる企業や団体があるから、そういうところに相談してみるといいよ」

その後Aさんは、インターネット等で研修プログラムについて調べ、農作業を取り入れたプログラムを用意しているコーディネーターを見つけました。電話やメールで問い合わせたり資料を取り寄せたりして概要や大まかな費用がわかったところで、企画書を書き上げて部長に提出しました。

部長「おいおい。ただの“土いじり”が研修になるのかい？ なんだか心配だなあ」

見慣れぬ研修内容に部長はハラハラの様子です。

Aさん「座学では得られない経験ができるんです。部長、ぜひ一緒に事前体験に行きましょう！」

何事も百聞は一見に如かず。まずは人事部のメンバーで1日体験に参加することにしました。

コーディネーター「ようこそ。今なら大根の収穫ができますよ」

最初は気乗りしない様子だった部長も、大根を引き抜くうちに夢中になっていきました。

部長「空気もおいしいし、無心になってリフレッシュできたよ。職場とは違うみんなの顔も見れたし、それぞれの個性をどう仕事に生かしていくかも考えるきっかけにもなった。管理職にもいいなあ」





2. 関係者で打合せ(前年度:冬～春)

頑張った甲斐あってAさんの企画書が、晴れて次年度の研修プログラムとして通りました。これからはコーディネーターと二人三脚で研修の身を詰めていきます。

Aさん「田んぼを貸してくれる農家や宿泊施設まで、コーディネーターが手配してくれるから大助かり」



役割分担の例

(37ページ参照)

だからといって任せきりにせず、研修実施者として積極的に協力し、さらに内容を充実させましょう。

3. 事前説明会(当年度:4月上旬)

4月になり新入社員が入社してきました。集合研修の場を借りて事前説明会を実施します。新入社員たちも「研修で田植え？」と興味津々です。



グループ分けは男女比はもちろんのこと、性格や希望配属先等も参考に、なるべく偏りが出ないようにしました。

食物アレルギーがある人がいないかを確認するのも忘れません。

Aさん「わからないこと、不安なことがあれば、私に聞いてくださいね」

また、当日までコーディネーターとも打合せを重ねていきます。

楽しく、スムーズに作業するためのコツ

(38ページ参照)

安心・楽しい食体験のために

(47ページ参照)

主催者側の問い合わせ先を必ず通知しましょう。

4. 当日(当年度:4月下旬)

いよいよ研修当日がやってきました。ここまでいろいろと用意してきたAさん。あとは参加者になるべく多くのものを学び、楽しんでくれるようにサポートとして立ち回ります。

研修最終日には、グループごとの感想発表会を実施。また個別にアンケートもとりました。参加者がこの研修をどう感じたかを知る手がかりにします。



当日の進め方

(38ページ参照)

タイムスケジュール

(39～41ページ参照)

安全対策

(44ページ参照)

5. ふりかえり・検証(当年度:5月～)

Bさん「お疲れさま。研修が終わったけれど、どうだった？」

Aさん「大変でしたが、とても充実していました。参加した新入社員間はもちろん、受け入れ先農家とも研修後の交流が続いているようです。新入社員の配属先からは「今年の新入社員は仕事に対する心構えが違う」と評価する声が届いています。今年は田植えのみでしたが、来年は稲刈りもして『春に課題を見つけ、秋で解消』してもいいかもしれません」

Bさん「そこまで考えてるんだ。これでもうAさんも立派な人事担当者だね」



早くも次の研修を構想し始めたAさん。きっと来年度の研修はさらに充実したものになることでしょう。

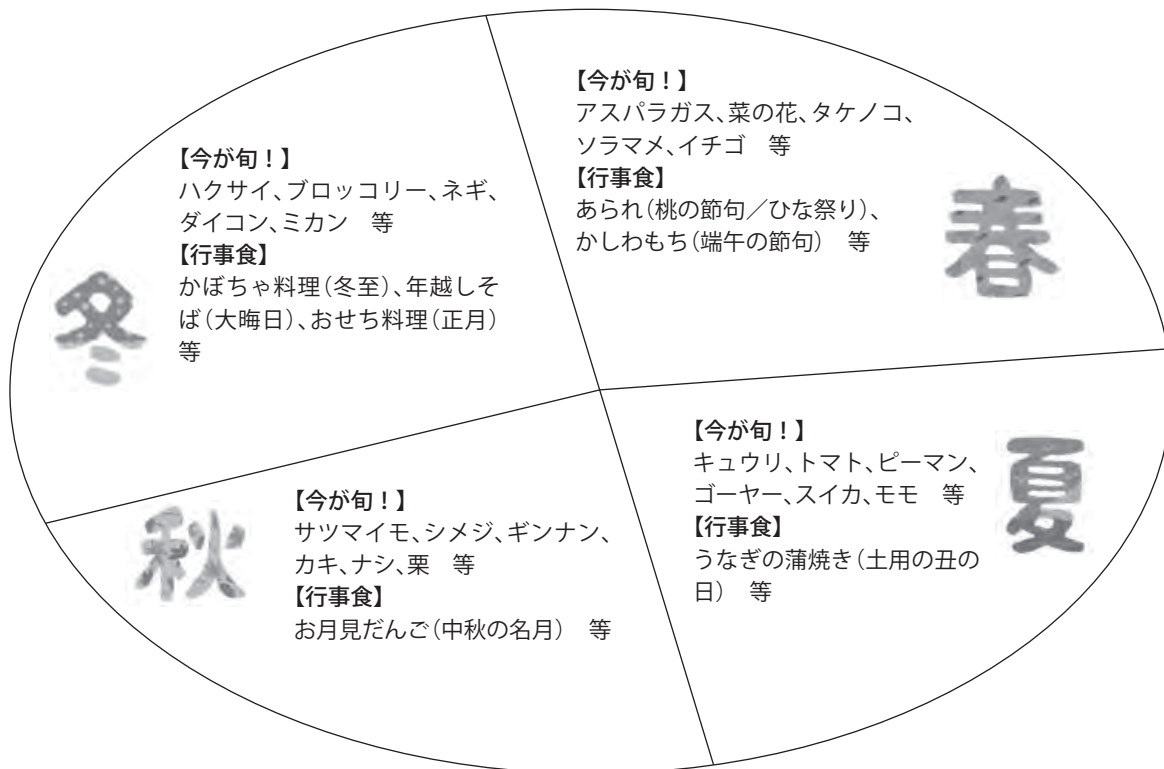
生活の基本「食」を楽しみましょう！

「食」は、私たちの生活にとって欠かすことのできない大切なものです。農林漁業体験は、その「食」の根本である生産活動に触れる絶好のチャンスです。せっかくですからもう一歩さらに踏み込んで、私たちの「食」について考えてみませんか。

普段の「調理して食べる」の頭に「自分で栽培した／さっき収穫した野菜を」とつくと、それはもう「特別な食事」です。農林漁業体験での思い出を増やすことができます。

特に子ども連れの参加がある場合は、子ども達の「食」に対する興味・関心を引き出すことにもなります。

「旬」を意識して野菜・果物をチョイス！



参考：農林水産省「子どもの食育 食べ物と日本の四季」

http://www.maff.go.jp/j/syokuiku/kodomo_navi/learn/seasons1.html

おまけイベントで更に充実

この他にも、体験プログラムを追加すると、さらなるリフレッシュ効果も期待できます。

例) ハイキング、山登り(園場の近く)、竹細工(簡単なもの、竹とんぼ等)、梅干づくり、キャンプ、星空観察、芋煮会、かぼちゃのランタン作り、もちつき、雪遊び(かまくらづくり、そり遊び)、スキー・スケート教室 等